



### ■ 創英のDNA…

司会 ■ 今日、「現在の創英」についてというテーマで、副所長の皆様にお話を伺います。皆さんは、まずは「担当者」という立場で入所され実務経験をされ、その後、副所長となり、現在は、全体のマネジメントをされていますから、その経験から、入所当時からあり、今も引き継がれている、創英の「良いところ」をお話し頂けますか。

黒川 ■ 私は入所して20年目になります。当時は、実務未経験で資格もありませんでした。入所してはじめて実務を訓練し担当し、弁理士試験に合格、現在に至るわけですが、その中で感じている「良いところ」、創英の多くの方が言う事ではありますが、「風通しが良い」ことです。私が20年、創英でやってくることができたのもこの点が大きいですね。「何かやろう」と言った時に、賛同する人もいれば、反対の人もいます。反対の場合は、「こういう理由だから、反対」と意見を言う。長谷川さんのキャラクターに依るところが大きいとは思いますが、とにかく自由にいろいろなことを言えたというのが、すごく良かったと思いますし、今後ずっと続いてほしいな、というところですね。

意見を言うのもそうですが、行動も同じです。やりたい気持ちがあれば、基本的には、「何でもやらせてくれる」というところが、もう一つ大きなところですね。これは老若男女、新人、ベテラン、担当する法域を問わず、あらゆる人にチャンスは開かれていると思います。ヤル気がない人にとっては厳しい場だと思いますが、創英には自己実現の場が常に用意されています。自身の具体例だと、弁理士になって1年もたたない頃、「出張でアメリカに行きたい、英語がどれだけ通じるか試してみたい」と長谷川さんにお願しました。「じゃ、行ってこい」と。現地代理人事務所が主催する4週間のセミナーに行かせてもらいました。折角だから、USの事務所を回って、当時ブームだった、ビジ

### 創立30周年記念特集

## 「創英の現在」を語る

前号に引き続き、創立30周年記念の特集を組みました。今号は、「創英の現在」をテーマとした副所長座談会で、現在をフランクに語ってもらいました。前号で振り返った「過去」をふまえて、「知財の匠集団」創英の今ある姿を皆様に少しでも感じていただけると幸いです。

<出席者>

司会：柳 康樹  
副所長：黒川 朋也  
副所長：黒木 義樹  
副所長：清水 義憲

ネスモデル特許のプレゼンをしてきたら…ということになり、私も「やります！」と答えました。海外出張経験がない弁理士1年生に、創英の名前を背負って代理人を回らせた。今から思えば、「よくやらせたなあ」というふうに思いますが、これで私の度胸はつきました。このように、経営者や上長といった立場から見たら、リスクな事も多々あると思いますが、そういう創英のDNAは、過去から続いていて、今後も続いてほしい「良いところ」だと思いますね。

黒木 ■ 私は1999年に弁理士試験合格者として入所し、15年以上が経過しました。創英には、色々な人がいて、その人達が有機的に繋がり、協働・連携しているところが良いところだな…と感じますね。一人が出来る事は残念ながら、限られています。皆が協働すれば、1×人数分以上のものができ、結果、お客様にもより良いサービスが提供できるとしています。あと、教育システムも素晴らしいと思います。私の入所当時は、今ほど教育体制は充実してはいませんでした。「人を育てる」という理念は当時からありました。教育するという事は人的・時間的コストがかかりますが、教えることは自分の勉強にもなります。教え、教えられる感じで、高めて行こうという雰囲気。このような連携・協働する、教育するという環境は今後も残していきたいな、と考えますね。

清水 ■ 私も、99年2月1日入所で、黒木さんとは同様のキャリアです。当時は企業の研究者で、「バックグラウンドは化学です」と言ったら、「化学は要らない」と言われ、受話器を置こうとしたら「ああ！」という声が聞こえ、切る直前にピックアップしたら、「一人ぐらい良いよ」と言われ、受験に来て…という経緯で入りました。そんな経緯ですから、化学・製薬・バイオの仕事は、当時は、殆どないという状況でした。そういう経験の中で思うことは、創英は「お客様に恵まれているな」と



いうことです。入所直後にバイオブームがきて、当時は、明細書の技能もまだまだだったと思いますが、お客様も寛大で、審査の現場で鍛えて頂く場を頂いたのだと思います。良いお客様が見守ってくださり、我々の成長を支えて下さったお客様が多かったな…という気がします。

大企業の範疇に属する企業に13~14年いた立場で、私が当初、違和感があったのは、計画を中・長期で立てそれをブレイクダウンするという方式で物事を進めていかないところでした。今思うには、それが逆に「良いところ」ではないかと。いわば、「究極の日和見主義」ですかね。人材育成は長期計画で育成する必要がありますが、事務所の運営的な部分でいえば、業界的に長期スパンが立てづらいから、短期のスパンで風を読んでどんどん切り換えて行く…これがこの業界には合うのだな…という気がしています。

### ■ 現在、そして未来へ …創英のDNAの承継

司会 ■ 続いて、お三方には、創英の良いところとして挙げられた点について、自由にディスカッションして頂きましょう。

黒川 ■ 言いたいことが言えるというのは、2つの点で良いと思っています。1つは、誰かに言われたままやるのではなく、疑問があれば質問し、議論し、解決し、納得して出来ることです。そして、もう1つは、言ったからには自分で責任をもってやらなければいけないという「責任感」を持つことです。言われたからやって、「やっぱり失敗したよ」という、そういう逃げ道が残ってしまうのは、よくない。言いたいことを言って、その代わり責任を持ってやるという、それがすごく良い事だと思います。だから、言いつ放しではダメで、そういう文化を創っていきたいですね。

清水 ■ 私としては、言いたいことを言う人が今よりもっと増えてもいいかな、と思っています。特に、若い人には、思った事を今以上に言うことを推奨したいですね。言う内容は、それこそ不安や不満でもよいと思います。不満や要望が出てくるというのは、その分、今の環境をより良くしていくために色々と考えているということの裏返しですから。思った事を言う、相談してみる…言える風土が創英にはありますから。

黒木 ■ 言った以上は言ったことはやり切らないといけません。それに付随して何か直接的な成果を直ぐに出さないといけないのではと考えてしまい、ためらってしまう人が居るかもしれません。でも、直接的な成

果なんか直ぐに出ることは稀です。そんなことで悩んでいないで、若い人には貪欲にチャレンジしてその壁をぜひ乗り越えてほしいところですね。

私も外国に行きたいと言いつせぬに悩んだこともあったけれど、最終的には申し出ることで行かせてもらい、それが今の創英の「短期駐在制度」につながって来ました。最初は行かせてもらうからには、外国でなにか仕事を取って来なくちゃいけないのかなと、勝手に想像してなかなか言えなかった。もっと早く言って米国に行っておけば、さらに世界が違ったのかなと…。だから、そういう希望がある方はどんどんチャレンジしてほしいですね。

### ■ 自己実現と協働・連携 ～そして「知財の匠集団」へ

司会 ■ 創英の横の繋がりが素晴らしいという話がありましたが、この点では何かありますか？

黒川 ■ 私は、特許部門から意匠・商標部門に移ってから、とにかく特許の人たちと協働して色々な事をやろう、やろうと言ってきました。最近では浸透して来て、実際に一緒に活動する機会が増えていっていると思います。これだけ色々な分野の専門家がいるのだから、それは活かさないという意味が無い。これは今後も押し進めて行きたい。多法域からの多面的な視点で考えながら仕事をするというのが重要だと思うし、それは日ごろから心掛けています。

司会 ■ 因みに、横道に逸れて恐縮ですが、弁理士の目指すところとして、独りでなんでも出来る人になるのか、強みを作って総合力を上手く引き出すような力が必要なのか、若手はどういうスタンスでスキルを磨くのがよいと思われるか？

黒木 ■ 一人で何でもできるということは有り得ないので、やはり総合力を上手く引き出す力は必要でしょう。「この件はこの人に助けを求めればよい」というのが分かっており、且つその人の力を上手く引き出す環境を整備できる力が必要でしょう。実務を進める上では、これは目指すところという必須のスキルだと思います。これとは離れて、弁理士としてどういう方向を目指せばよいか、と言う悩みも聞きますので、この点についてコメントすると、やっぱり人それぞれかなと思います。もちろん、少なくとも一つの核となる強みは持つておく必要はあると思います。そこから先は、色々な方向性があると思います。色々な情報・ネットワークを広く持っているという方向もあれば、その核となる強みをとことんさらに突き詰める方向もあると思います。事務所としても、色々な人が有機的に



絡まり合った方が良くないかと思えます。自分はどうなりたいかというのを考えてやって行く必要がある、と私は、思いますね。

**清水** ■私は、国内の仕事は、少なくとも俺はここには絶対強いという、何かそういう所を一人ひとり持つように努力しないと、ダメかなと思っています。外国は、自らの知識をふまえた上で、いかに在外代理人の能力を引き出すかという考えですね。日本国の代理人である以上、「ここは俺に任せてくれ」とかいう所を自分なりに作って行くのが必要かなと。あとは、「この事を知っている人を知っている」みたいな、そういう知識も同時に必要で。その組み合わせで行けば良いんじゃないかなと、個人的には思っています。

**司会** ■それは、技術分野という意味ですか？

**清水** ■「この人に任せると絶対自分のために120%努力してくれるし、努力している姿が楽しげで、特にそれについて恩を着せないよね。さりげないよ。」といった感覚を「お客様が勝手に感じるようになる」とベストですね。

**黒川** ■考えている事はおそらく同じだと思いますが、私は意匠・商標部門に移った時に一番最初に言ったのは、「それぞれのメンバーが“T型プロフェッショナル”になりましょう」と。たしか大前研一さんの言葉の受け売りだったと思いますが…。例えば知的財産の専門家だったら、知的財産の全分野で広い知識は持ってなきゃいけない。これがTの横棒ですね。広い範囲の知識、ただ、それはそれはすごく深くなくてもよい。でも、その広い知識だけではダメで、自分の得意分野を少なくとも1つ持って、そこをとにかく深く極めて行く、Tの縦棒ですね。で、このT型のプロフェッショナルになりましょうと。そのT型で各人の得意分野が少しずつずれていけば、そのTの深さが深い所がいろんな所に来るので、それが“くし形プロフェッショナル集団”になります。そうすれば、全範囲で色々な事を深くカバー出来るので、そういうチームを目指したいという風に言いました。実現度合いは今はまだわからないけれど、目指す所はそこです。

### フレキシブルなビジネス対応と 長期的視点に立った人材育成

**司会** ■ビジネス的には時代の変化に対応し、人材育成は長期ビジョンで、という話がありましたが、そのあたりは、ほかにもありますか？

**黒木** ■確かに変化が激しいですので、日々そうやって柔軟に目の前の事をやりつつ、ベストなモノに持って行くような体制というのは、必要なかなと思えますね。

**黒川** ■計画を立てて、その通りにうまくいく業界じゃ

ないというのが、私もやっぱり解ってきて、より重要なのは、その時々状況に合わせて舵を切っていく、それがもう固定的になったら、むしろ終わってしまうのではないかな、そんな感じですかね。

**清水** ■明日とか来月、どんな制度が出来るか分からないし、お客様の意向もどうなるか分からない。だからこそ、短期で舵を切って、舵を切った時に全員がバツと動けるような体制になっているのは大事なかなと思っています。そのためには、「マインド」は共通に持った方が良くないかと思えますよ。いつも誰かに聞かないと、左に歩か、右に歩か、分からないというのはダメだと思うんです。だから、創英のマインドを持つことが大事です。長谷川さんから言われたことしか方針が無いというのは、マインドがないのと一緒です。

**黒木** ■「所謂」「仕事の四か条」といったものが続いて来ていますし、これからも持っていないといけないマインドではあると思えます。

**黒川** ■若手がなにかを聞きに来る場合、「これこれ、こう考えますけど、良いですか？」という聞き方をしてほしいと言っています。単に「こういう状況です。どうしますか？」と聞かれたら、私は絶対、「〇〇君は、どうしたい？どうしたら良いと思う？」というふうに聞き返すようにしています。そうしないと、いつまで経っても、指示がなきゃ出来ないということになってしまう。それは重要な事だと思っています。

**黒木** ■私もよく聞かれる立場ですから、同じように「どう思う？」と、先ず考えてもらうようにもしていますね。先ず自分で考えないと、次に応用が利かないんですよ。

**清水** ■同じですね。「昔こうだったから…」と単に過去の記憶に頼ったり、「先輩がこうすればいいと言ったから…」と理由を考えずに行動しようとする人がいた場合は、まずは自分の頭で考えるように指導することはありますね。

**司会** ■今日は、ありがとうございます。創英で実務を学ばれ15年、20年と勤続され、副所長になっているお三方の、現在の創英の良いところと将来展望や若手へのエール、聞きごたえがありましたね。途中、自己実現という言葉もありましたが、これは正しく今年のテーマです。創英は、そもそも自己実現の場を提供していると、長谷川さんがよくおっしゃっています。そして、それをするための創英のDNAだったり、環境だったり、それがどう作られてきたか…ということが良くわかりました。良い文化はこれからも承継していかなくては…と思いました。

以上

## 創英 写真館

# 創立 30 周年記念特集

～30周年記念イベントのスナップをお届けします～

今年も恒例のお花見会を開催しました



まずは30周年を迎えた所長の意気込みを聞く真面目なひととき…



様々なコスチュームに着替え、日頃の感謝を込めて所員同士でおもてなし



### 創英スタートの地へ御礼詣り



創業の地、愛宕山神社に感謝詣りへ。これからも末永く創英をよろしく！